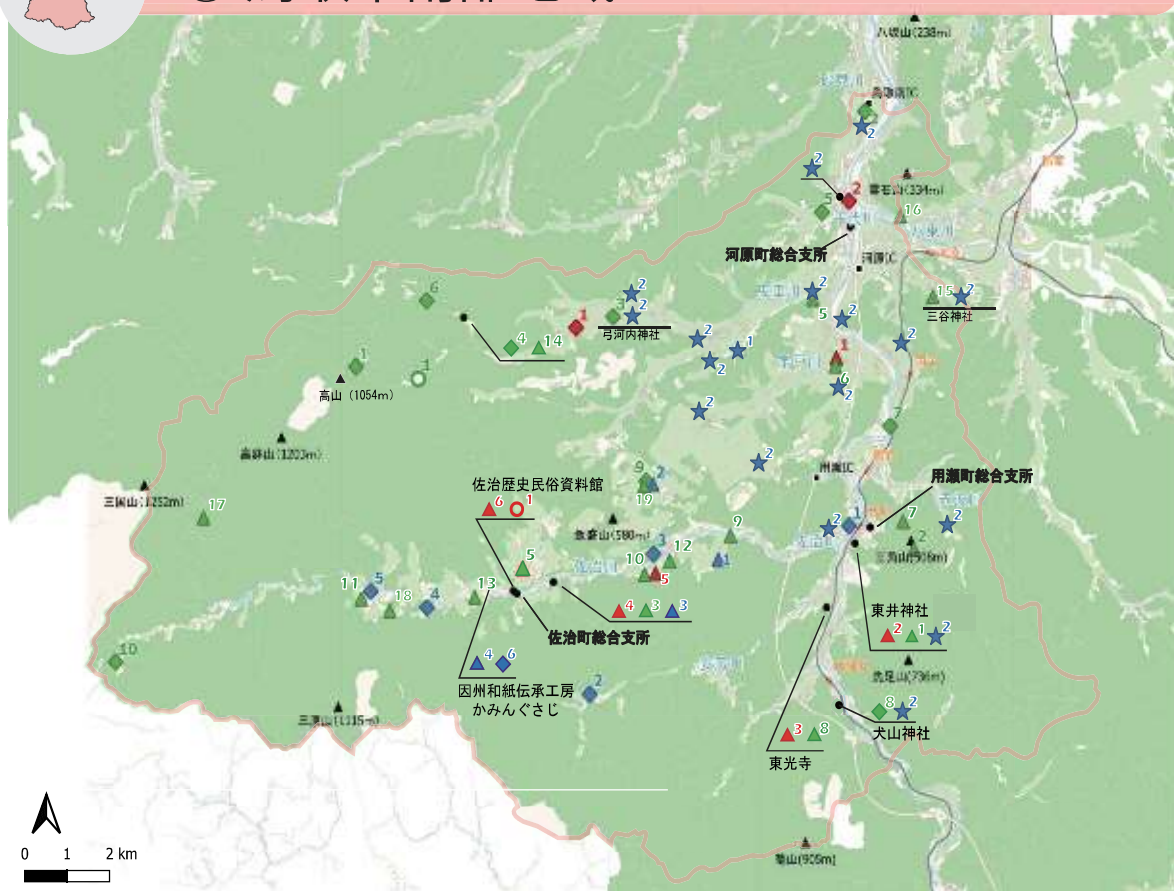


## ⑥ 鳥取市南部地域



● 鳥取市南部地域・指定文化財位置図

指定文化財のリストは、P187・188 参照。

### 【地 勢】

本市の南部地域にあたるこの地域は、旧八上郡の一部であった河原町と旧智頭郡の一部であった用瀬町、佐治町で構成されています。東は八頭郡八頭町、西は東伯郡三朝町と岡山県鏡野町、南は八頭郡智頭町と岡山県津山市に接しています。地域の西には中国山地の一部である三国山塊があり、西端の三国山(1,252m)から高鉢山(1,203m)、高山(1,054m)、南西の三原山(1,115m)など1,000m級の山々が連なっています。東は千代川の源流のある鳥取県八頭郡智頭町の沖ノ山(標高1,318m)の山地に挟まれたわずかに平地が開ける地域です。周囲を山々に囲まれたこの地域の北側には、千代川によって形成された低平な沖積地である鳥取平野が広がっています。

地域を北流する一級河川の千代川には、中国山地の三国山塊を源流とする佐治川、曳田川、八東川などの多くの支流が注ぎ込み、鳥取平野の中央を貫流し、日本海へと注ぎます。



● 霊石山 (334 m)



● 三角山 (頭巾山) (508 m)



● 洗足山 (736 m)

## 【歴 史】

隣接する岡山県鏡野町の<sup>おんぼら</sup>恩原高原では旧石器時代の遺跡が確認されており、人々が古くから山間地で生活をしてきたことが確認されています。この地域で旧石器時代の遺跡は確認されていませんが、縄文・弥生・古墳時代の暮らしに伴う遺跡が確認されており、古くから人々が活動していたことが知られています。古代・中世のこの地域は因幡国の「智頭郡」と「八上郡」にまたがっており、『古事記』（712年編纂）において八上郡と八上姫が登場し、『日本書紀』（720年完成）では八上郡久多美村の記述が見られるなど大和政権との交流がうかがえます。

中世以降は、八上郡の一部にあったとされる石田荘は高野山や<sup>かつおじ</sup>勝尾寺領に含まれ、因幡佐治郷司であった<sup>さじしろうしげさだ</sup>佐治四郎重貞が、鎌倉幕府によって佐治郷地頭職を安堵され、因幡守護職山名氏の家臣であった用瀬氏が景石城を居城として現在の用瀬町を治めていました。しかし、天正9年(1581)羽柴秀吉が鳥取城を攻略したことにより、八上郡が宮部継潤領、智頭郡が鬼ヶ城（現若桜町）城主木下平太夫の領地となり、磯部康氏が景石城に入り用瀬・佐治一帯を治めます。

慶長5年(1600)の関ヶ原の合戦後、宮部氏などが没落したことにより、千代川を境に東側が池田長吉領、西側が鹿野城主亀井茲矩領となりますが、元和3年(1617)に亀井氏が津和野に移封され、池田光政領となりました。その後、池田氏が城下町の改修や街道整備を行ったことにより、<sup>かわほら</sup>河原は千代川の水運の要衝として、用瀬は鳥取藩主の参勤交代の際に休憩する「御茶屋」が設けられ、それぞれ発展していきました。

近代に入ると、明治29年(1896)に智頭・八上・八東郡が合併し、八頭郡となり、大正8年(1919)、因美軽便線（現在のJR因美線）の鳥取駅一用瀬駅間が開通して以後、当地の産業・経済はさらに発展していきました。

特に河原では明治・大正・昭和初期にかけて養蚕が農家の副業として発達しましたが、その後桑園は次第に二十世紀梨や花御所・富有柿などの果樹園・菜園・たばこ畑へと移っていきました。佐治では因州和紙生産のほかに果実（梨）栽培が行われました。

また、地域の文化を発信する施設として、昭和63年(1988)に「流しびなの館」、平成6年(1994)に「お城山展望台河原城」と「さじアストロパーク」、翌年に因州和紙伝承工房「かみんぐさじ」がオープンしています。



● 霊石山と河原周辺  
(千代川と八東川の合流地付近)



● 景石城跡から見る用瀬宿及び佐治谷

【鳥取市南部地域年表】

時代	年代	できごと
縄文時代	中期～後期	佐治町葛谷遺跡、古市上山根遺跡から深鉢や後期の鉢・石鏃が出土。
弥生時代	後期	金鍔原遺跡や大井聖坂遺跡、高山の一軒原第3遺跡からは弥生後期の土器が出土。
古墳時代	5世紀頃後半～6世紀前半	鳥取市南部地域最大級の前方後円墳である「嶽古墳」築造される。
古代	元正天皇年間(715～724) 元慶3年(879)	因幡に駅家4ヶ所が増置され、そのうち3ヶ所は八上郡に属する。 八上郡古代郷(河原町付近)が荘園化し、石田荘となる。用瀬は因幡の守護・山名氏の家臣であった用瀬氏が領した。
中世	建暦3年(1213) 元龜3年(1572) 天正8年(1580) 天正9年(1581) 慶長5年(1600)	因幡佐治郷司であった佐治四郎重貞が、鎌倉幕府によって佐治郷地頭職を安緒される。 山中幸盛(鹿之助)、尼子勝久因幡に侵入、山名豊国を援けて甕山城に拠る。 羽柴秀吉の第1回鳥取城攻めの際、弓河内村の北村六郎左衛門が秀吉軍に味方し、数々の功績を挙げたことで感状を賜る。 羽柴秀吉の第2回の鳥取城攻めにより、鳥取城や景石城落城。この時弓河内村に禁制を発し保護する。 八上郡は宮部継潤領となり、用瀬・佐治は鬼ヶ城(現、若桜町)城主木下平太夫に付けられた磯部康氏が景石城の城主として、用瀬地域の開発・整備を行う。 関ヶ原の戦いで宮部氏と木下氏が没落。千代川を境に池田長吉領と鹿野城主亀井茲矩領に分けられる。
近世	元和3年(1617) 寛永9年(1632)	河原・用瀬・佐治は池田光政領となる。 池田光政と池田光仲との国替を経て、明治初期まで鳥取藩領になる。
近代	明治43年(1910) 大正7年(1918) 大正8年(1919) 大正15年(1926)	口佐治村、中佐治村、上佐治村が合併して佐治村となる。 用瀬村が町制施行。 因美軽便線(現在のJR因美線)の鳥取駅～用瀬駅間が開通。(鳥取駅～津山駅間の全通は昭和7年(1932)) 河原村が町制施行。
現代	昭和30年(1955) 昭和63年(1988) 平成6年(1994) 平成7年(1995) 平成16年(2004) 令和元年(2019)	河原町と国英村、八上村、散岐村、西郷村が合併し、河原町誕生。 用瀬町と社村、大村が合併し、用瀬町誕生。 用瀬町営「流しびなの館」オープン。 「お城山展望台河原城」オープン。 「さじアストロパーク」オープン。 因州和紙伝承工房「かみんぐさじ」オープン。 河原町、用瀬町、佐治村と鳥取市が合併。 麒麟のまち圏内(鳥取市を含む1市6町)によるストーリーが、日本遺産に認定。

【鳥取市南部地域の指定文化財と登録文化財】

※令和3年3月31日時点で、地域内にある指定文化財を掲載。

		No.	指定種別	名 称	所 在 地	資料編掲載頁
もの	◆	1	保護文化財	勢至菩薩立像	河原町北村 観音寺	P17
		2	保護文化財	和蘭陀写水指	河原町河原	P18
	▲	1	保護文化財	青い目の人形	河原町佐貴	P35
		2	保護文化財	東井神社キリン獅子頭	用瀬町用瀬	P34
		3	保護文化財	東光寺経筒	用瀬町古用瀬	P39
		4	保護文化財	木造薬師如来坐像	佐治町加瀬木(藤森山福善寺)	P34
		5	保護文化財	絹本着色釈迦十六善神の図	佐治町大井	P33
6	有形民俗文化財	うるしかきの用具	佐治町福園	P41		
○	1	登録有形民俗文化財	佐治の板笠製作用具及び製品	佐治町福園	P13	
凡 例	◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定、○…国登録					

		No.	指定種別	名 称	所 在 地	資料編掲載頁
場	◆	1	名勝	三滝溪	河原町北村	P28
		2	保護文化財	木下家住宅	河原町布袋	P14
		3	天然記念物	弓河内の大シダレザクラ	河原町弓河内	P30
		4	天然記念物	落河内の大キリシマ	河原町北村	P29
		5	天然記念物	長瀬の大シダレザクラ	河原町長瀬	P30
		6	天然記念物	落河内のカツラ	河原町北村	P29
		7	天然記念物	和奈見と塩上の枕状溶岩	河原町和奈見地内 千代川河床	P31
		8	天然記念物	犬山神社社叢	用瀬町宮原	P29
		9	天然記念物	田岡神社のツバキ樹林	佐治町津無	P29
		10	天然記念物	辰巳峠の植物化石産出層	佐治町栃原	P30
		11	天然記念物	赤波川溪谷のおう穴群	用瀬町赤波 赤波川河床	P30
	▲	1	保護文化財	東井神社本殿	用瀬町用瀬	P32
		2	保護文化財	三角山神社本殿	用瀬町用瀬	P32
		3	保護文化財	笹尾神社の薬師堂	佐治町加瀬木	P32
		4	保護文化財	林泉寺の山門鐘楼	佐治町高山	P32
		5	史跡	嶽古墳	河原町曳田	P43
		6	史跡	武田高信の墓	河原町佐貴	P45
		7	史跡	景石城跡	用瀬町用瀬	P42
		8	史跡	東光寺山経塚跡	用瀬町古用瀬	P46
	○	9	史跡	佐治四郎の遺跡	佐治町刈地	P46
10		史跡	熊野神社遺跡とその附近	佐治町大井	P46	
11		史跡	山内与四郎左衛門の遺跡	佐治町余戸	P46	
12		史跡	経塚の跡	佐治町大井	P46	
13		史跡	大水の庚申塔	佐治町加茂	P46	
14		天然記念物	岩付のマツ	河原町北村	P47	
15		天然記念物	三谷神社のシダレザクラ	河原町三谷	P48	
16		天然記念物	国英神社の大イチョウ	河原町片山	P48	
17		天然記念物	山王谷の大栃	佐治町中	P48	
18	天然記念物	鳥居原の摺曲	佐治町余戸	P49		
19	天然記念物	西尾家の大キリシマ	佐治町津無	P48		
○	1	登録有形文化財	杣小屋拱堰堤	河原町杣小屋	P12	
凡 例	◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定、○…国登録					

		No.	指定種別	名称	所在地	資料編掲載頁	
こし	★	1	重要無形文化財	白磁（保持者 前田昭博）	河原町本鹿	P5	
		2	重要無形民俗文化財	因幡・但馬の麒麟獅子舞	河原町三谷、高福、釜口、河原、布袋、曳田、本鹿、牛戸、小畑、弓河内、佐貫、山上、小倉、用瀬町用瀬、赤波、別府、宮原	P4	
	◆	1	無形民俗文化財	用瀬のひな送り	用瀬町	P24	
		2	無形民俗文化財	江波の三番叟	用瀬町江波	P22	
		3	無形民俗文化財	口佐治神社の獅子舞	佐治町古市	P23	
		4	無形民俗文化財	細尾の獅子舞（神楽獅子）	佐治町加茂	P23	
		5	無形民俗文化財	余戸の雨乞踊	佐治町余戸	P24	
		6	無形文化財	因州佐治 みつまた紙	佐治町加瀬木、大井、刈地、高山、津無、加茂、眷谷、河本	P26	
	▲	1	無形民俗文化財	センス踊り	佐治町刈地	P40	
		2	無形民俗文化財	大黒舞おどり	佐治町津無	P41	
		3	無形民俗文化財	笹尾神社の当渡し	佐治町加瀬木	P40	
		4	無形民俗文化財	佐治谷話（口承文芸）	佐治町福園	P40	
	凡例	★…国指定、◆…鳥取県指定、▲…鳥取市指定					



● 流しびなの館



● 因州和紙伝承工房かみんぐさじ



● お城山展望台河原城



● さじアストロパーク

## 35. 古代から近世の交通の要衝

智頭町の沖ノ山に源を発して、鳥取市を南北に貫き日本海に流れ出ている千代川には、約2～3億年前、日本列島のほとんどが海の底だった頃の痕跡である「和奈見と塩上の枕状溶岩」が見られます。その支流である佐治川や曳田川、八東川が中国山地の山間を流れます。このうち、佐治川沿いに見られるV字谷は、長い年月をかけて河川を流れる水が川岸の岩や山肌を削り、砂を海に供給していたことをうかがわせます。このように形成された谷底の平野部に人々が暮らし始め、古墳時代には嶽古墳、大井1号墳、鷹狩1号墳などの古墳が丘陵上に築かれます。

そして、千代川や支流に沿って活動の場を広げる人々の移動の跡はいつしか道となり、中国山地を超えて美作・播磨地方へ抜けていく智頭往来と呼ばれる街道となりました。因幡国が成立した時代、八上郡と智頭郡の一部にまたがるこの地域は、街道における交通の要衝となりました。

因幡国司に就任した国司たちがこの街道を通り、国庁が置かれていた国府平野へ向かうようになった頃に編纂された『古事記』には、「因幡の素戔やかみひめ」に八上比売が登場し、平安時代の『延喜式』に記述される式内社である「売沼神社」に祭られています。また、奈良時代の開創の由緒を伝える大安興寺だいあんこうじ、平安時代後期の作と推定される観音寺せいしほまつりゅうぞうの勢至菩薩立像や古用瀬の東光寺経筒とうこうじきょうづつなど、7世紀頃因幡国にもたらされた仏教文化の痕跡がこの地域にも残っています。

時代が武家が国を治める中世へと移り変わると、因幡国守護の山名氏の家臣であった用瀬氏が拠点とした景石城は、天正9年(1581)の羽柴秀吉の鳥取城攻め以降には磯部氏が城主になり、城下町としての用瀬が整えられました。

その後、江戸時代に入り鳥取城主となった池田氏が因幡国を治めるようになると、景石城は廃城されますが、用瀬は参勤交代にも利用され智頭往来沿いの宿場町として発展し、本陣、牢屋、制札場が設けられ、往時の街並みの面影が今も残っています。江戸末期から明治にかけて用瀬茶は特産品として知られ、因幡国きっての茶所となりました。また千代川支流の佐治川沿いに開けた佐治には、日本三大銘石の一つとされる「佐治(川)石」や「因州筆切れず」と呼ばれるみつまた紙、佐治漆等の特産品が生まれました。

河川交通が行われていた頃、千代川と佐治川の合流点である用瀬は、陸路だけでなく水路も物流拠点となり、地域の物産品や人々の往来によって発展しました。

また用瀬の下流域にある河原も千代川と曳田川、若桜谷方面から流れる八東川の合流地点であることから、河川交通の物流拠点として発展したほか、橋の無かった千代川を渡る「渡し場」が各所に設けられ、鳥取藩主も参勤交代の際にはこれを利用しました。



● 用瀬とその周辺

河原の智頭往来沿いには、江戸時代初期に亀井茲矩の本陣を勤めたと伝えられる木下家住宅があり、江戸中期造と伝えられる主屋や、江戸時代後期に建築された蔵などは、往時の様子を今に伝えています。



● 35. 古代から近世の交通の要衝 ストーリーマップ

## 36. 八上比売と焼き物の郷

今も豊かな自然が残る三滝溪を上流域に持つ曳田川沿いには、奈良時代に編纂された『古事記』の「因幡の素兎」に登場する八上比売を祀る売沼神社が鎮座し、対岸の嶽古墳に埋葬されたとはいわれています。

八上比売が眠るこの地域は、因幡国が成立した頃から八上郡とされており、売沼神社の周辺は、曳田川に沿って開けた平野部となっています。この平野部に隣接する丘陵上には、大型の前方後円墳である嶽古墳（全長 50 m）や、中井 1 号墳（全長 60 m）を含む中井古墳群、稲常古墳群などが築かれていることや、『万葉集』に登場する「八上采女」という女性が、身分の違いによる恋によって、故郷の因幡国八上郡に退去させられたと伝えられていることから、この地域に有力な豪族が存在していたことを示唆しています。

さらに平安時代中期に編纂された『延喜式』の神名帳に、式内社として売沼神社を含めた 5 社が記載され、平安時代後期の作とされる勢至菩薩立像も残っています。

また、この地域の周辺からは焼き物に適した土が産出され、天神原では 6 世紀後半頃に須恵器を焼成したと考えられる「天神原窯跡」が確認されるなど、古くから焼物の生産が行われていました。鳥取藩より「因久山」の名を下賜された因久山窯（八頭郡八頭町久能寺）の杉本勘助（杉本系初代）の作である和蘭陀写水指が伝わっています。

現在でも天神原窯跡の周辺は、焼き物の生産が盛んに行われている地域です。江戸時代後期に開窯した牛ノ戸焼は、水壺、徳利、すり鉢といった日用品を製作していましたが、4 代目窯元小林秀晴が鳥取の民藝研究家吉田璋也と出会ったことで製作方針を変え、「用の美」を追求し、その作品は実用性において高い評価を得ています。

因州・中井窯の初代坂本俊郎は昭和 20 年（1945）に窯を開き、牛ノ戸焼の小林秀晴、吉田璋也、柳宗悦の指導で民芸品の製作にとりかかりました。2 代目坂本實男は「鳥取県伝統工芸士」の認定を受け、現在 3 代目の坂本章氏は地元の土を使い、黒・白・みどりの釉薬を使った作品を世に送り出し続けています。

やなせ窯は、前田昭博氏が開いた窯で、大阪芸術大学を卒業後郷里で築窯し、独立して作陶に専念します。以来、白磁の製作技法や表現について独自に研究を続け、活発な創作活動を展開しながら技を錬磨し平成 25 年（2013）国の重要無形文化財「白磁」の工芸技術保持者に認定されました。

古代から続く焼き物の文化は、今も火を絶やすことなく続いています。近年は、「いなば西郷工芸の郷づくり」をすすめて、それに呼応して移住してきた陶芸家たちによる新たな窯がつけられ、地域の活性化や産業の育成と文化の創造が図られています。



● やなせ窯の白磁



● 牛ノ戸焼



● 因州・中井窯





● 36. 八上比売と焼き物の郷 ストーリーマップ



● 三滝溪（県名勝）



● 嶽古墳（市保護文化財）



● 売沼神社

## 37. 山あいに残る様々な信仰

この地域に広がる豊かな自然は、<sup>あがなみ</sup>赤波川溪谷のおう穴群に見られるような神秘的な景観を創り出しました。自然の創造力は、7世紀頃に伝わった仏教と結びつき、神仏習合をはじめとした様々な信仰のかたちを生み出しました。

佐治川右岸に南面した山の斜面に残る熊野神社遺跡は、古墳時代から近世までの祈りの場の変遷が見られる遺跡で、古墳時代ごろに積石塔（墳墓）<sup>しやくせきとう</sup>が築かれた祭礼の場には、現在の和歌山県にある熊野大社からの熊野信仰が取り入れられ、さらに点在する巨岩を御神体とする信仰の場となりました。江戸時代には、参道の両脇に石仏も安置され参詣者も増え、無病息災や学問、安産にもご利益のある信仰の場所として栄えました。

用瀬宿の面影を残す街並みの背後にそびえる三角山は、花崗岩の風化と浸食によって形成された山頂付近に巨岩が並ぶ修験道の修行場で、山頂には三角山神社本殿が建立されています。創建は定かではありませんが、寛永3年(1626)の棟札が残っています。

平安末期の末法思想により、経典を地中に埋めて墳形に土盛りし、弥勒菩薩出世まで写経を保存しようとした経塚が、東光寺等で確認されているほか、<sup>しょうふくじ</sup>昌福寺に伝わる絹本<sup>けんぼん</sup>著色釈迦十六善神図や、<sup>さんもんしようろう</sup>笹尾神社の薬師堂、林泉寺の山門鐘楼などから、この地域の仏教の繁栄ぶりがうかがえます。また、文政10年(1827)の建立とされる大水の庚申塔には、仏教界のあらゆる菩薩や如来たちの名が刻まれ、自然とともに暮らす人々の仏たちへの切なる願いが込められています。



●37. 山あいに残る様々な信仰 ストーリーマップ



● 用瀬アルプス（三角山～洗足山）



● 景石城跡から北側を望む



● 熊野神社遺跡（市史跡）



● 三角山神社 本殿（市保護文化財）



● 赤波川溪谷のおう穴群（県天然記念物）

<コラム> 現在も残る民間信仰

犬山神社が鎮座する<sup>かごやま</sup>麓山(905 m)山麓の村では、現在でも各部落が「荒神さん」や「天王さん」といわれる祭神を独自に祭る祠が設けられ、祈りを捧げ続けてきました。このような民間信仰は、地域の人々によって今も受け継がれています。



● 岡集落の荒神様と田園風景

### 38. 舟運と鮎のまち

千代川流域の人々は、豊かに流れる水に多くの恩恵を受けながら、積極的な活用を図ってきました。

鹿野城主亀井茲矩によって整備がはじまり、慶長7年(1602)に完成した大井手用水は、千代川の支流である八東川はつとうや曳田川ひけたが合流する河原付近に取水堰を設け、下流域の高草郡の田畑に水を供給しました。

また千代川の速い流れと、清流が育んだ鮎あゆは、身が引き締まり、形、香りともに評判が良く、江戸時代に編纂された『因幡志』では、河原村の土産として「あゆのすし」が取り上げられています。

この河原には、江戸時代の参勤交代路にも使われた智頭往来が千代川に沿って通り、多くの人々が行き交っていました。この街道沿いには、通行人が休憩するための茶屋があったほか、江戸時代初期の鹿野城主亀井茲矩の参勤交代の際の本陣となったといわれる木下家住宅が残っています。

この街道は、円通寺あたりで千代川を渡ることとなりますが、当時は橋がなく、舟による渡し場が円通寺や渡一木わたりひとつきに設けられていました。主に高瀬舟たかせぶねによる物資の運搬が行われ、千代川と八東川の合流地点にある河原は、上流の智頭と若桜からの筏流しの中継地点として重要な位置にありました。

現在、渡一木付近には、鮎料理を出す料亭が残っているほか、千代川袋河原公園では毎年あゆ祭が開かれています。また、「お城山展望台河原城」には、河原町の歴史・伝説・文化・自然・産業などが展示紹介されているほか、「河原歴史民俗資料館」では、民俗資料の展示ではなく地域に残る民俗行事の伝承活動が積極的に行われています。



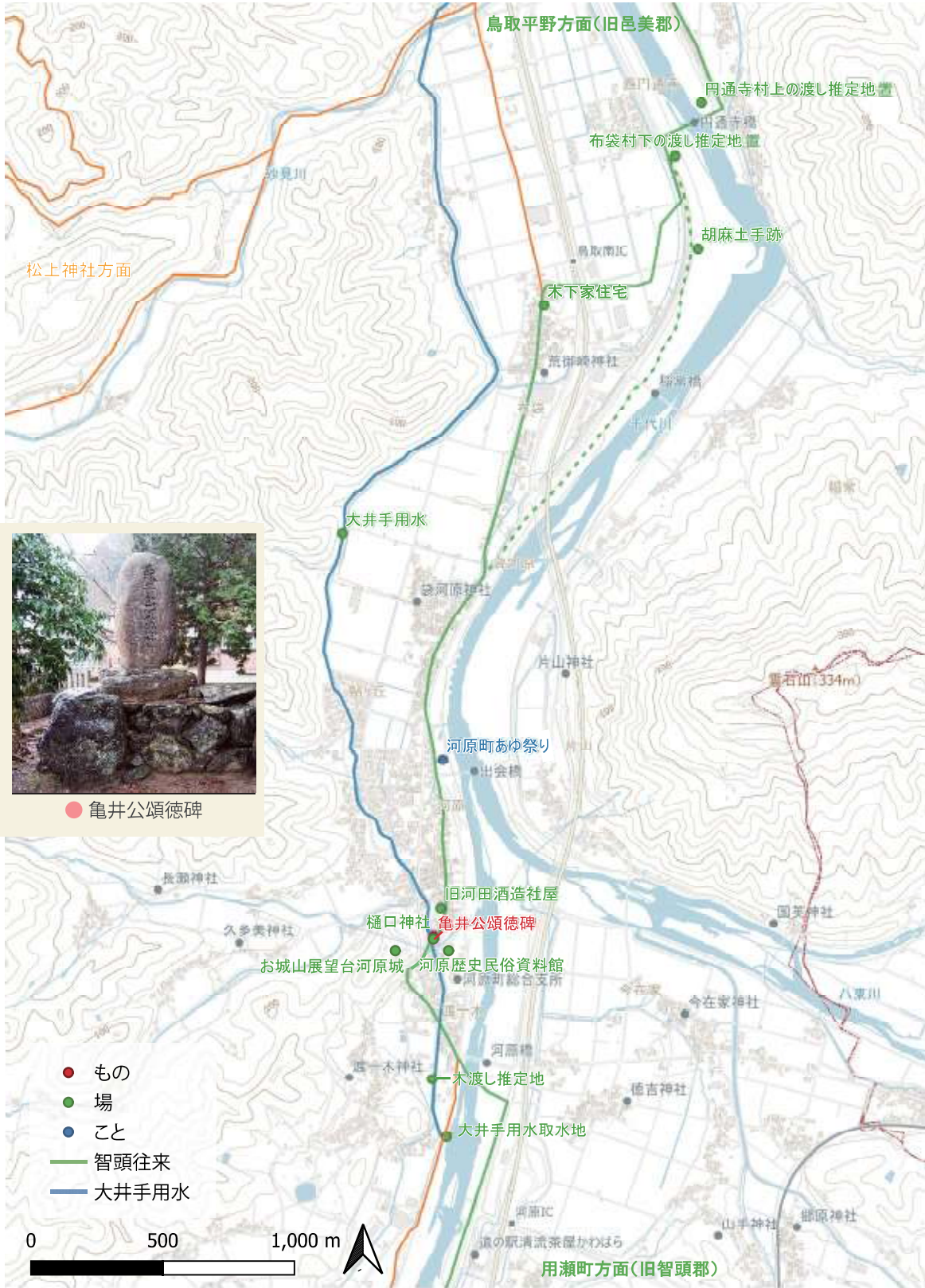
● 河原の町と千代川



● 木下家住宅（県保護文化財）



● 千代川のアユ釣り



● 38. 舟運と鮎のまち ストーリーマップ

### 39. 用瀬宿とひな送り

鳥取城下より千代川を約 16 km さかのぼった場所に位置する用瀬は、江戸時代、智頭往来の宿場町として栄えた地域です。

智頭往来は上方往来とも呼ばれ、鳥取藩の参勤交代にも使用されたことから、宿場町内には藩主が休憩する「御茶屋」が設けられていました。そのため、背後にそびえる三角山山頂 (508 m) の三角山神社本殿は、弘化 2 年 (1845) 鳥取藩主によって寄進されているほか、用瀬の産土神が鎮座する東井神社本殿は、明治 5 年 (1872) 鳥取藩の尚徳館 (藩校) 内の社殿が移築されたもので、この地域と鳥取藩とのつながりがうかがえます。

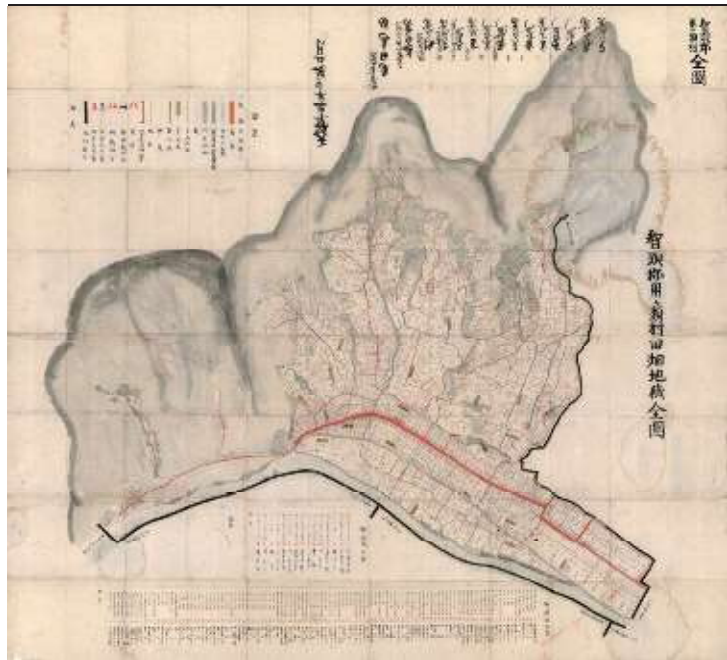
この宿場町には背後にそびえる三角山系から流れる川を、町の区割として利用し、また住民の生活用水として利用できるよう街道筋の西側に付け替え、裏側を意味する「セド」の音を充てて瀬戸川と呼ばれています。食べ物を洗ったり、水を汲んだりなどの作業を行う「イトバ」が各戸ごとに設けられたほか、宿場町の繁栄に伴って旅館や飯屋が増えたことで、精米等のための水車が整備され、最盛期には 17 基の水車が稼働していました。

用瀬は、智頭往来のほか千代川を利用した河川交通の拠点でもあり、近郊の物資の集積地でもありました。そのため毎月 6 回行われていた「二七の市」は、周辺の村々から人々と物資が集まり活況を呈し、昭和初期まで続いていました。

このように、人と物が集まり繁栄した用瀬には、江戸時代から続く貴重な伝統行事が残されており、中でも「ひな送り」は、日本に古くから伝わる形代 (かたしろ=ひとがた) に、一切の災いを移して川や海に流す風習の名残りと考えられています。

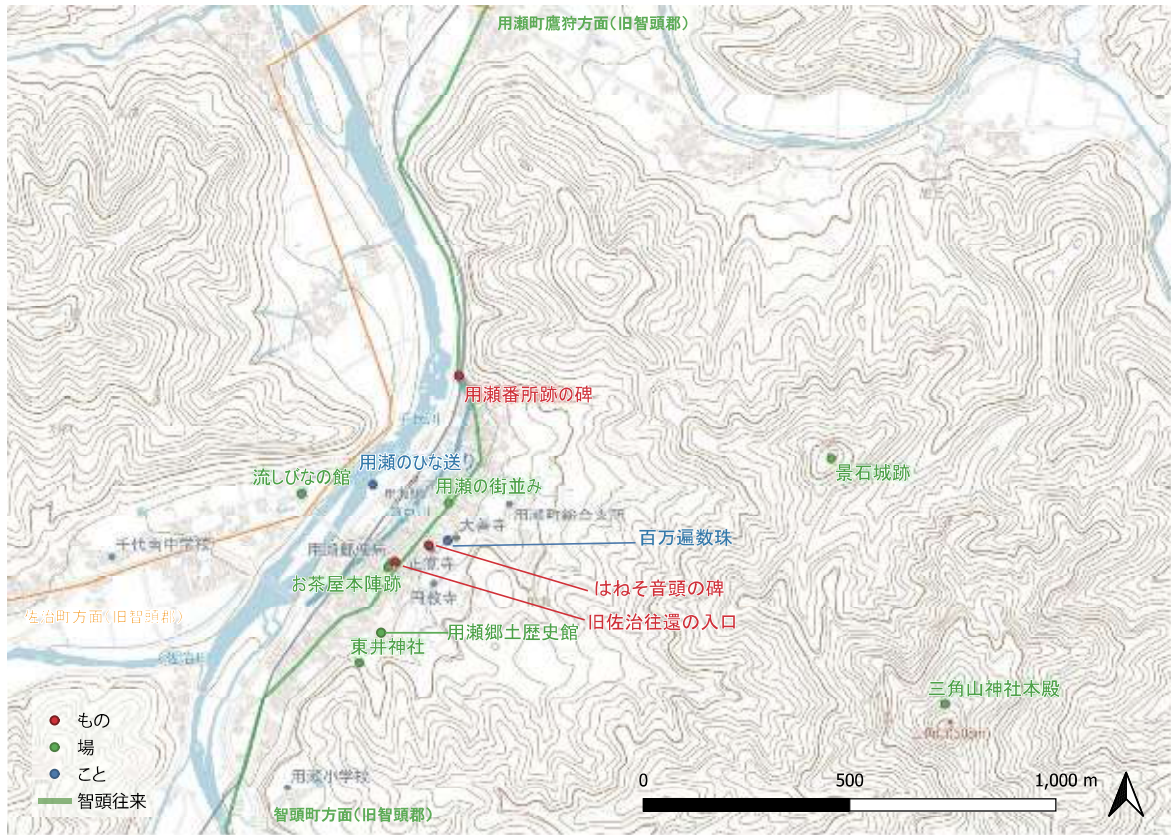
このほか、境内に樹齢 100 年以上のしだれ桜がある大善寺には、百万遍数珠やはねそ踊りが伝わり、このうちはねそ踊りは近隣の正覚寺に場所を移し「用瀬のはねそ踊り」として残っています。

これらの伝統行事が残るこの町は、宿場町の時の町割りが今も残っており、江戸時代の面影を偲ぶことができます。



● ちづぐんもちがせむらでんばたじつづきせんず  
智頭郡用ヶ瀬村田畑地続全圖

江戸時代の終わり頃の天保 15 年 (1844) の「用瀬村」が描かれたものです。朱墨で記された智頭往来を中心とした町割り等を確認できる貴重な資料となっています。



● 39. 用瀬宿とひな送り ストーリーマップ



● 用瀬のひな送り (県無形民俗文化財)



● 瀬戸川の「鯉のぼり流し」

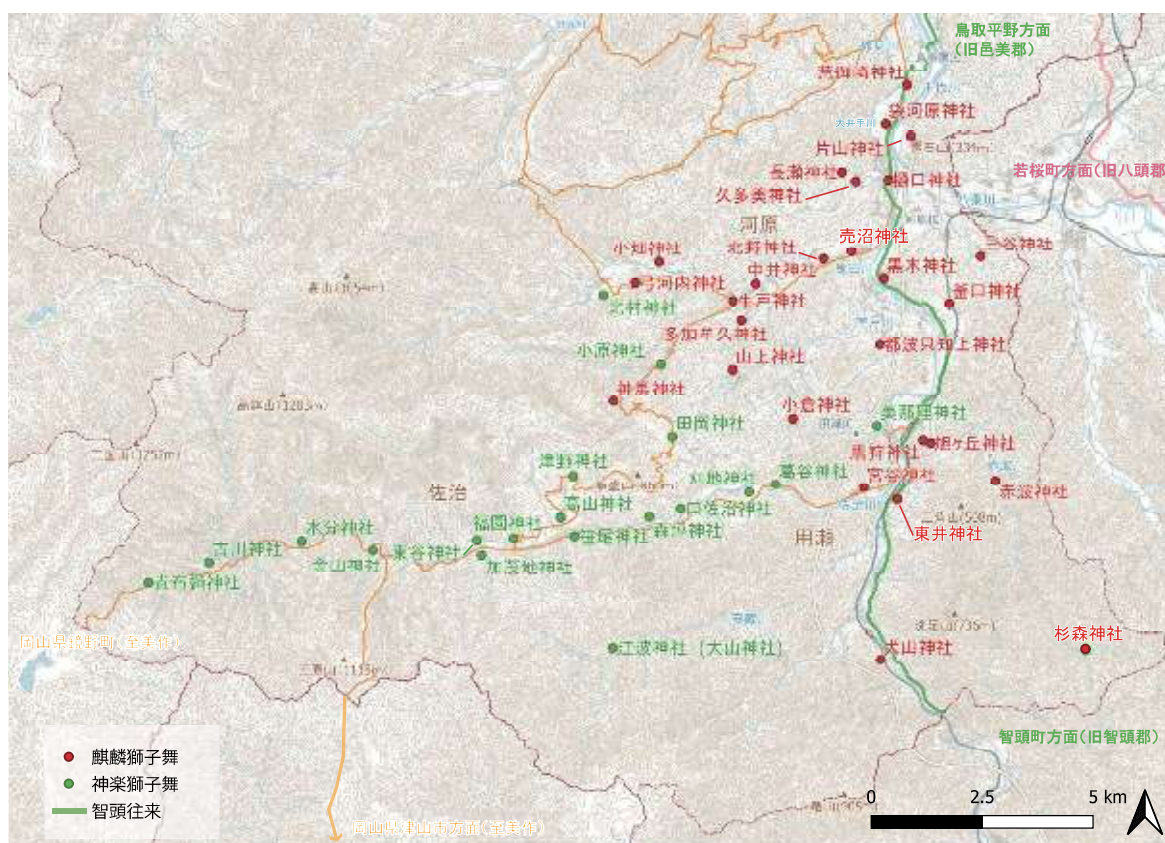
#### 40. 「麒麟獅子」と「神楽獅子」二つの獅子舞

中国の霊獣である麒麟を思わせる金色の獅子頭に、真っ赤な衣装をまとい、あやし役の狸々とともにゆったりとしたリズムで舞う麒麟獅子舞は、徳川家康の外曾孫にあたる鳥取藩主・池田光仲が、慶安3年(1650)に日光東照宮の御神体を分霊し祀る因幡東照宮(現在の鳥取東照宮)を建立し、承応元年(1652)の祭礼の行列に麒麟獅子舞を登場させたのがきっかけで、因幡地方を中心に広まったと考えられます。

因幡を中心に各地に広まっていった麒麟獅子舞は、地域の人に「獅子」といえばこの麒麟獅子を連想させるほど定着しており、この地域の片山神社や東井神社、犬山神社など、主に千代川流域付近に伝わっています。

一方、千代川の支流である佐治川沿いの口佐治神社や加茂地神社などでは、氏神の祭りに奉納される神楽獅子舞が伝わっています。伊勢神宮のお使いとして悪魔退散のお祓いをしてながら全国を巡業した「伊勢大神楽」にその源流があると思われ、口佐治神社の神楽獅子舞には、「剣の舞」や「寝獅子」など、伊勢神楽によく似た舞が見られます。

この地域に残る神楽と麒麟の2種類の獅子の舞は、地域の人々によって守られて現在まで伝わり、家族の健康や五穀豊穰などの願いを人々に届けてきました。



● 40. 「麒麟獅子」と「神楽獅子」二つの獅子舞 ストーリーマップ



## 麒麟獅子舞



● 犬山神社の麒麟獅子舞（屋住の麒麟獅子舞）



● 山上神社の麒麟獅子舞



● 片山神社の麒麟獅子舞



● 長瀬神社の麒麟獅子舞

## 神楽獅子舞



● 口佐治神社の神楽獅子舞（県無形民俗文化財）



● 細尾神社の神楽獅子舞（県無形民俗文化財）



● 江波神社の神楽獅子舞

## 41. 「佐治谷ばなし」と伝統産業

千代川の支流である佐治川によって形成された佐治谷の名は「幸谷」に由来するものと言われます。その佐治川に沿って東西約 16.6 km、南北約 8.6 km と細長い谷間に伝わる佐治谷ばなしは、世間知らずや常識知らずの人々の失敗談を、面白おかしく語り継いできた民話で、全 78 話が伝わっています。「さじ村の〜」から始まる「佐治谷ばなし」には、全国に伝わる昔話をモデルとしたと思われる話も多数あります。

佐治町では、江戸時代初期に現在の奈良県吉野村から漆かきと漆の木の栽培技術が伝えられて始まったとされる佐治の漆が、その品質の良さから全国的に知られていました。また、鳥取市の伝統産業となっているミツマタを使った因州和紙の生産も、原料の栽培に適した気候であり、積極的に技術改良が行われたことで、紙質が丈夫で墨色が鮮明なわが国有数のみつまた紙の産地となりました。

さらに佐治の板笠は、江戸初期から昭和 30 年頃まで、重要な産業として生産され、因幡地方はもとより伯耆地方や津山方面にまで出荷されていました。「佐治谷ばなし」にはこのような江戸時代からの伝統産業が日本各地との交流の中で、伝来した話があるのかもしれない。

「佐治谷ばなし」に代表されるこの地域の伝統を、後世に伝えていく努力を地域の人々が中心となって行っています。「さじ民話会」は、佐治谷ばなしの保存・伝承の活動を行っているほか、因州和紙伝承工房「かみんぐさじ」や、佐治漆研究会による「佐治漆」の復活などがそれです。また佐治歴史民俗資料館では、因州佐治みつまた紙や佐治漆、佐治の板笠など伝統産業やこの地域の歴史を伝えています。



● さじ民話会の活動



● 41. 「佐治谷ばなし」と伝統産業 ストーリーマップ